

森川竹磻の『欽定詞譜』批判（下）

萩原正樹

七

『欽定詞譜』に対する第七の批判は、以下の如く記されている。

其七、各調、檢作者年代、其在前者為首、即註謂此調以此詞為正體、余皆變格也、或謂此調始於此詞、以下字數多者、即謂某句添幾字、字數少者、即謂某句減幾字、或謂某句攤破作幾字、臨江仙註云、蓋詞譜專主弁體、以創始之詞、正體者列前、減字・添字者列後、茲從體製編次、稍詮世代、故不能仍挨字數多寡也、他調準此、夫詞之傳於今者、多訛錯誤脫、其亡而不傳者、知亦不為少、其存於今之調、亦未必為前無作者、可知不能以作者之先後、分詞之正變、又調之創始、可明知者、實不過十數調、而添字・減字、可判知者、亦不過若干調、爾余、字數之多少、或前有少數字・多數字之一體、而作者填之、亦未可知、而悉謂添字・減字、其妄莫甚焉、

各調に詞を配列する際、『欽定詞譜』は主に、創始の詞かあるいはその調の最も早い填詞例を冒頭に掲げ、以下の体を「變格」（或いは「變體」）として後に録するという方針をとっている。この基本方針は、『欽定詞譜』（「凡例」）に「每調選用唐宋元詞一首、必以創始之人所作本詞為正體、如憶秦娥創自李白四十六字、至五代馮延巳則三十八字、宋毛滂則三十七字、張先則四十一字、皆李詞之變格也、斷列李詞在前、諸詞附後、其無考者、以時代為先後」と説かれ、また、竹磻が引いている「臨江仙註」（『欽定詞譜』卷十）も同様の方針を繰り返し明らかにしたものであろう。

このような『欽定詞譜』に対して、竹磻は二つの点から批判を加えている。

まず、詞の正体、変格の区別に関して、現在に伝わる詞に「訛錯誤脱」が多く、さらに早に亡びて伝存しない作品も少なくないと考えられるため、「可知不能以作者之先後，分詞之正變」と論ずる。また、『欽定詞譜』が正体以外の詞体に正体を基準として「添幾字」「減幾字」等と註記している点について、創始の詞やその創始の詞体に添字、減字を施した詞体と確認できるものはわずかに過ぎず、みだりに添字、減字と称するべきではないと言うのである。次に、竹磬が挙げている四調の具体例について検討しておこう。

(1) 万年歡

就中奇者，如万年歡，先錄王安礼詞，註謂此調押平韻，以此詞為正体，余皆變格也，其詞後詰^①，終須待結実，恁時佳味堪嘗。結実下誤脱二字，則無疑，次錄無名氏詞，後結，吾皇願永保洪図，四方長樂升平。註謂結句添二字，試問無名氏為何代人，

「万年歡」について『欽定詞譜』（卷二十六）は、詞牌下註に「此調有三体，平韻者，始自王安礼，仄韻者，始自晁補之，平仄韻互叶者，始自元趙孟頫」と述べ、平韻体四体，仄韻体六体，平仄韻互叶体一体の計十一体を録している。このうち平韻体四体は、竹磬が言うように王安礼詞九十八字体を正体とし、高麗史樂志無名氏詞一百字体，趙師俠詞一百一字体，賀鑄詞一百二字体の三体を変格とするのである。

『高麗史』（卷七十一，「樂志」・「唐樂」）に収められている歌詞は、『欽定詞譜』（卷九，「迎春樂」）も「按宋以大晟樂賜高麗，其樂章皆北宋人作，故高麗史樂志，有宋詞一卷」と論じているように，北宋徽宗朝の崇寧四年（1105）に設立された太晟府の歌詞であると考えられることができる。それ故『欽定詞譜』は，景祐元年（1034）生まれの王安礼（卒年は紹聖二年，1095）の詞を先行の作と断じ，高麗史樂志無名氏詞以下を変格としたのであろう。

しかし、『高麗史』所収の太晟樂歌詞には，柳永や晏殊，歐陽修などの仁宗朝（1022～1063）の詞人の作も収められており^②，一概に北宋末の作品群とみなすことはできない。この無名氏の「万年歡」詞も，無名氏の作である以上，

王安礼詞より早く製作された可能性もあり、竹篔が「試問無名氏為何代人」と批判するのは、いわば当然のことと言えるのである。

なお竹篔が引く王安礼詞後闕第四韻「終須待結実，恁時佳味堪嘗。」は、『欽定詞譜』では「終須待・結実恁時，佳味堪嘗。」と句読を切っている。このため『欽定詞譜』は、高麗史樂志無名氏詞末句「四方長樂升平。」を「結句添二字」と註しているのであるが、ここは詞意から見ても竹篔の句読の方が正しいと思われる。徐本立『詞律拾遺』（卷四，「万年歡」）も「終須待結実，恁時佳味堪嘗。」とし、前闕末句「渾疑是・姑射冰姿，寿陽粉面初妝。」と比して「渾疑句七字，終須句五字，疑即是一百字体，而誤脱二字」と述べている。竹篔が「結実下誤脱二字，則無疑」と言うのは、恐らくこの『詞律拾遺』の説に従ったのであろう。現在では『全宋词』（第1冊，264頁）も「終須待結実，恁時佳味堪嘗。」と切っており、『欽定詞譜』の句読は誤りとすべきである。

(2) 風入松

次に竹篔は、「風入松」について以下のように述べる。

如風入松，録晏幾道七十四字詞，註謂此調以此詞及吳詞（謂吳文英七十六字詞）^⑨為正体，若趙詞（謂趙彦端七十三字詞）^⑩康詞（謂康与之詞，七十三字，其前段第四句誤脱一字者）之減字，皆變格也，七十四字・六字，俱為正体，而七十二字者不得為正体之理，果從何論定乎，

『欽定詞譜』（卷十七）は「風入松」の作例として、晏幾道詞七十四字体、趙彦端詞七十二字体、康与之詞七十三字体、吳文英詞七十六字体の四体を掲げている。このうち最も時代の早いのは晏幾道の作品であり、晏幾道詞を正体とすることについては、先に挙げた『欽定詞譜』の基本方針からすれば異論はないであろう。だが、吳文英詞七十六字体をも正体に列していることは、作例排列方針から逸脱していると言わざるをえない。

『全宋词』及び『全宋词補輯』（孔凡礼輯，中華書局，1981）によって「風入松」の作例（存目詞を除く）を検してみると、すべて六十五調のうち、七十四字体が二十四調、七十六字体が三十四調存しており、七十六字体が七十

四字体の作例数を上回っている。『欽定詞譜』が呉文英詞七十六字体をも正体としたのは、恐らくその作例数の多さに配慮したためと考えられる。しかし、作例の多寡によって正変を区別するとは『欽定詞譜』の何処にも記されておらず、唐突の感を免れがたい。

『欽定詞譜』において、一つの詞牌の中で複数の詞体を正体としている例は、他にも多く見られる。森川竹溪は「七十四字・六字，俱為正体，而七十二字者不得為正体之理，果從何論定乎」と皮肉な言い方をしているが、「凡例」で述べられた方針以外の考え方が本編で通用しているならば、どの詞体が正体となってもおかしくないはずであろう。竹溪は、『欽定詞譜』の編纂がこの点で甚だ恣意的であり、統一性を欠くものであることを、厳しく批判しているのである。

(3) 步蟾宮

如步蟾宮，蔣捷詞，註謂此調以此詞為正体，前後段第三句俱七字，較楊詞（謂楊无咎五十八字詞）各減一字，既曰正体，又曰減字，其未減者，不知為何体，

「步蟾宮」は、『欽定詞譜』（卷十三）に黄庭堅詞五十九字体，楊无咎詞五十八字体，蔣捷詞五十六字体，汪存詞五十五字体，全芳備祖章氏詞五十七字体を収め，その蔣捷詞註に，竹溪が引くごとく「此調以此詞為正体，前後段第三句俱七字，較楊詞各減一字」と述べられている。竹溪は，蔣捷詞を正体としていながら，同時に変格である楊无咎詞と比して減字と言う『欽定詞譜』の無神経さを，強く批判するのである。

『欽定詞譜』が載録する五詞のうち，最も早いのは慶暦五年（1045）生まれの黄庭堅の作である。また，楊无咎詞五十八字体も，既に慶暦六年（1046）生まれの晁端礼に作例（『全宋词』第1冊，442頁）があり^⑥，『欽定詞譜』の方針によれば，そのいずれかを正体とすべきであろう。にもかかわらず，時代的には最も遅い蔣捷詞を正体としているのは，黄庭堅詞註に「此調昉自山谷，但宋元詞，俱宗蔣捷体」と記されているように，先の「風入松」の例と

同様、作品数の多寡を考慮に入れた結果であった。『欽定詞譜』は、この点でまず、自らの方針を破ったとして批判を受けなければならないだろう。さらに『欽定詞譜』は蔣捷詞について、正体でありながら減字でもあるという非常に矛盾した見解をとっているのである。

『欽定詞譜』において添字、減字が論じられる場合、最初に挙げた竹篔の説にも見えている通り、正体を基準とするのが普通である。竹篔は、このような添字、減字の扱い方を不満とするのであるが、それなりに一貫しておれば、これも一つの態度であると言うことができる。しかし、ここでは明らかにその一貫性を失っているのである。竹篔は「其未減者、不知為何体」と述べているが、黄庭堅詞五十九字体と楊无咎詞五十八字体とは、『欽定詞譜』によれば、正体に先んじて製作され、正体の詞体の基礎となった変格ということになるろう。

(4) 看花回

又如看花回，周邦彦詞，註謂此調，惟此詞与蔡詞，句豆齊整，音韻諧婉，可以為法，若黄詞之平仄獨異，趙詞之添字，皆變格也，以字句之整否，斷詞格之正變，羌無故實，

『欽定詞譜』（卷十五、「看花回」）は、まず詞牌下註に「此調有兩体，六十八字者，始自柳永，樂章集注大石調，中原音韻注越調，無別首宋詞可校，一百一字者，始自黄庭堅，有周邦彦，蔡伸，趙彦端諸詞可校」と述べて「看花回」に兩体が有ることを論じ、前者の詞体として柳永詞六十八字体，柳永詞六十七字体，後者には黄庭堅詞一百一字体，周邦彦詞一百一字体，蔡伸詞一百一字体，趙彦端詞一百三字体，趙彦端詞一百四字体二体の作例を挙げている。このうち後者に属する周邦彦詞に、「此調惟此詞及蔡詞，句讀整齊，音韻諧婉，可以為法，若黄詞之平仄獨異，趙詞之添字，皆變格也」と註されているのである。

「句讀整齊，音韻諧婉，可以為法」という理由で、『欽定詞譜』は周邦彦詞と蔡伸詞とを正体としたのであるが、では黄庭堅詞は、周詞や蔡詞の体例と

相当な差異のある詞体なのであろうか。黄庭堅の詞を、『欽定詞譜』の文字、句読によって示せば、以下の如くである。

看花回

黄庭堅

夜永蘭堂，醺飲半倚頽玉。爛漫墜鈿墮履，是醉時風景，花暗殘燭。歡意未闌，舞燕歌珠成斷續。催茗飲・旋煮寒泉，露井瓶竇響飛瀑。

織指緩・連環動觸。漸泛起・滿甌銀粟。香引春風在手，似閩嶺越溪，初采盈掬。暗想當時，探春連雲尋篁竹。怎歸得・鬢將老，付与杯中綠。

（『欽定詞譜』卷十五，なお，は句，・は逗，.は仄韻を示す。以下同。）

一方、『欽定詞譜』が正体とする二体のうち，周邦彦詞の句式を各句の字数を以て略記すれば，次のようになる。

六，四．六，五，四．四，七．三・四，七．

三・四．三・四．六，五，四．四，七．三・三，五．

（周邦彦「看花回」，『欽定詞譜』卷十五）

両首を比較してみると，その相違は，前関第一，二句が黄庭堅詞では「四，六．」という句式になっているのに対して，周邦彦詞では「六，四．」となっている箇所のみであり，他の部分の句式においては，両首はすべて一致している。また、『全宋詞』（第1冊，404頁）は，黄庭堅詞の前関第一，二句を「夜永蘭堂醺飲，半倚頽玉．」と切っており，この句読を正しいとすれば，両首は完全に同一の詞体ということになる。いずれにしても，詞体の上で黄庭堅の作が特に隔絶した存在であるとは，言えないのである。

さらに『欽定詞譜』は，「黄詞之平仄独異」とも述べているが，この点においても黄庭堅詞は，周詞や蔡詞と大きな差異があるとは思えない。繁を避けて前関第二韻までを例にとり，今度は蔡伸詞と比較してみよう。

仄仄平平，平仄仄仄平仄。仄仄仄平仄仄，仄仄平平仄，平仄平仄。

（黄庭堅「看花回」）

仄仄平平平仄，仄平平仄。仄仄仄平仄仄，仄仄仄平平，仄平平仄。

（蔡伸「看花回」）

多少の相違はあるが，「平仄独異」という程のものでないことは，明らかで

あろう。

『欽定詞譜』の基本方針に従えば、『欽定詞譜』自身が「一百一字者，始自黃庭堅」と言う^⑥ように，黄庭堅の詞を正体とすべきところであろう。しかし『欽定詞譜』は，さして根拠のない「句読整齊，音韻諧婉，可以為法」という全く別の新たな規準を以て，黄庭堅の作より遅れる周邦彦詞と蔡伸詞とを正体と定めたのであり，これに対して竹磎が「以字句之整否，斷詞格之正變，羌無故実」と言うのは，極めて正当な批判なのである。

万樹は『詞律』（「発凡」）において，それ以前の「詞譜」について「旧譜之最無義理者，是第一体第二体等排次，既不論作者之先後，又不拘字数之多寡，強作雁行」と非難し，『詞律』の排列方針を「本譜，但以調之字少者居前，後亦以字数列書又一体又一体」と定めた。

一方『欽定詞譜』は，作者の先後により，正体，変格の別を設けて排列するという方針を採ったのであるが，これが失敗であったことは，以上の竹磎の批判からも明らかであろう。この方針では，「万年歡」の例に見えるように，無名氏の作例の扱いが困難となる。しかも『欽定詞譜』においては，この方針そのものに一貫性を欠き，しばしば恣意的な正体，変格の決定が行なわれているのである。

各詞牌に複数の詞体がある場合，もともとそこに正変の区別があったわけではない。「詞譜」を利用しようとする人は，編纂者の恣意的な正変の断定を求めているのではなく，各詞体の整然とした排列とそれぞれの詞体の差異に関する解説をこそ求めているのである。

『詞律』に範をとった森川竹磎の『詞律大成』は，「発凡」に「於一調中，例字数少者居前，多者居後，間有字数少而居後者，一一註明其由」と述べているごとく，『詞律』の旧に従って各体を排列している。現在では，『詞律辞典』も文字数による排列方針を採っており，これが「詞譜」において最も適当な方法と言えるのではないだろうか。

八

第八の批判は、「少年心」を例に挙げて次のように述べられている。

其八，詞中用俳語者，間不采録，如少年心，録黃庭堅六十字一詞，註謂黃集又有添字少年心詞，亦平仄韻互叶，但前段起句，心裏人人，暫不見霎時難過，後段起句，見說那廝，如此自大，較此詞多七字，因詞俚不録，是甚為無謂，作譜本非選詞，若無他詞同體者，則俚亦不得不為一體也，

「少年心」という詞牌で『欽定詞譜』（卷十三）が挙げているのは，黃庭堅詞六十字体一体のみである。だが，詞牌下註に「調見山谷詞，有兩體，一名添字少年心」と見え，詞後の註に竹磻が引くごとく記されているように，黃庭堅には六十七字体の作例も存しているのである。詞体が明らかに異なっている以上，当然のことながら「詞譜」は，兩体を掲げてその体例の相違を説くべきであろう。ところが『欽定詞譜』は「因詞俚不録」と述べて，六十七字体を載録しないのである。竹磻の「是甚為無謂，作譜本非選詞，若無他詞同體者，則俚亦不得不為一體也」という批判が，正当なものであることは言うまでもなからう。

『欽定詞譜』においては，このように，俗語が多用されていたり文字に乱れのある詞体については又体に載録せず，また全く無視して註にも言及しないというケースがしばしば見られる。竹磻はさらに二調の例を引いて，このことを批判している。

(1) 鼓笛令

尤可怪者，鼓笛令，録黃庭堅宝犀未解一首，註謂此調祇有此詞，無別首可校，而黃集鼓笛令凡四首，皆用俳語，焉知為俳語而故意斥三詞乎，

『欽定詞譜』（卷十一）は，「鼓笛令」の作例として黃庭堅詞五十五字体の一体を掲げ，「此調祇有此詞，無別首可校」と註してこの詞牌を僻調と断じている。しかし竹磻が言うように，黃庭堅には他に五十四字体，五十五字体，五十六字体の「鼓笛令」三首（『全宋詞』第1冊，407・408頁）があり，「鼓笛

令」は僻調とは言えないのである^⑦。この三首は、いずれも用語や内容が卑俗ではあるが、だからと言って又体に挙げるのは不適當とすることはできない。

これらの「鼓笛令」詞はすべて、『欽定詞譜』が引いている作例（首句「宝犀未解心先透」）とともに、明・毛晋編『宋六十名家詞』所収『山谷詞』（一卷）にも載せられており、『欽定詞譜』の編纂者たちがこれを見ていないことはありえない。不注意による失検ならまだしも、『欽定詞譜』が故意にこれらの詞を無視したとすれば、その編纂態度は厳しく批判されなければならないであろう。

なお、『詞律辞典』（「鼓笛令」・334頁）は、「本書不忌諱鄙俚，凡能存調，存体之詞一概収采」と述べて、「鼓笛令」詞四首をすべて載録している。

(2) 飛雪満群山

又有旧刻残闕，不采録者，如飛雪満群山，録蔡伸詞，註謂此調，自此詞外，祇有張詞可校，其实蔡伸友古詞，此調凡二首，其一脱落二字，

「飛雪満群山」は、『欽定詞譜』（卷三十四）に蔡伸詞一百七字体，張矩詞一百六字体の二体が収められているが，蔡伸詞註に「此調自此詞外，祇有張詞可校」と言うように、『欽定詞譜』はこの二体のみを「飛雪満群山」の作例と考えている。だが竹篔が「其实蔡伸友古詞，此調凡二首」と指摘している如く，蔡伸には実はもう一首「飛雪満群山」詞があるのである。

蔡伸の詞集には，明刊本として明・呉訥編『唐宋名賢百家詞』所収『友古居士詞』（一卷）と『宋六十名家詞』所収『友古詞』（一卷）の両種が存する。この両刊本ともに「飛雪満群山」詞を二調録しているが，いずれも『欽定詞譜』とは別の一首（首句「絶代佳人」）に二字の脱落があり，後闕第二，四句がそれぞれ「□利率名役」「君已許□」となっている。しかしこの点を除けば，「絶代佳人」詞は『欽定詞譜』が載録している「飛雪満群山」詞（首句「氷結金壺」）とほぼ同体であり，一百七字体の校定には最も都合の良い作例と言えるであろう。

黄庭堅の「鼓笛令」と同様，この「絶代佳人」詞も『欽定詞譜』の編者た

ちが見落としたとは考えられない。これを敢えて作例と認めないのならば、『欽定詞譜』はそのことを註において詳細に論じるべきであった。

現在の『詞律辞典』（「飛雪滿群山」・263頁）は、「按蔡伸尚有“絶代佳人”一首，且平仄韻通叶。何謂“只有張詞可校”」と『欽定詞譜』を批判し、「飛雪滿群山」の作例として三体を掲げている。

最後に竹溪は、

黄集・蔡集，作譜者，豈有未一見之理乎，此二註亦奇矣，

と述べている。見ていたはずであるのに、その詞体を取り上げず、さらには全く無視してしまうという『欽定詞譜』の編纂態度は、「詞譜」編者として甚だ不適當な態度と言わなければならない。

各詞牌に属するさまざまな詞体をすべて明らかにすることは、「詞譜」が持つ重要な役割の一つであろう。すべて二千三百六体もの又体を挙げる『欽定詞譜』も、この点においては信を措くに足りないことを、竹溪の批判は示しているのである。

九

第九の批判は、『欽定詞譜』に引用される詞の句読の誤りに関する説である。

其九，句豆之誤，亦間有之，或叶韻註為句，或偶合句註為叶，其杜撰多与旧譜一例，如後唐莊宗歌頭一調，句豆不明，而確然分句，寧得不敬服，

『欽定詞譜』に句読の誤りが多いことは、『欽定詞譜』を利用した人の誰もが感ずることであろう。第七の批判において挙げた王安礼の「万年歡」と黄庭堅の「看花回」にも、誤りが見られた。さらにもう一例を補足すれば、柳永「金蕉葉」詞の後闕第三，四句を、『欽定詞譜』（卷十四）では「就中有箇，風流暗向燈光底。」と切っている。これが誤りであることは明白であろう。ここは、『詞律』（卷四）や『全宋词』（第1冊，20頁）の如く、「就中有箇風流，暗向燈光底。」^⑨とするのが正しい。このような例は，他にも多数見ることができる。

また竹磔は「或叶韻註為句，或偶合句註為叶，其杜撰多与旧譜一例」と述べ、『欽定詞譜』が叶韻を句とし，句を叶韻とする杜撰さを批判している。竹磔は具体例を挙げていないが，以下に句を叶韻としている一例のみを掲げておきたい。

それは，梅苑無名氏（実際は宋・趙温之）の「喜遷鶯」詞一百三字体（『欽定詞譜』卷六）であるが，まずその詞を『欽定詞譜』の文字，句読によって挙げておく。

瓊姿氷体。料瑩光乍伝，広寒宮裏。北陸寒深，南園春早，此後万花方起。
翦霞鬪萼，裁雲砌蕊，天与高致。太瀟瀟，最宜雪宜月，宜亭宜水。
好是天涯庾嶺上，万株浮動香千里。屏写横斜，鬢插垂鬟，占尽秀骨清意。
醉魂易醒，吟興信来，佳思無際。為伝語，向東風，甘使無言桃李。

この詞の前関第一句「瓊姿氷体。」を、『欽定詞譜』は叶韻としているのであるが，実はこの詞には同じ『梅苑』（卷三）に次韻詞が存在し，それによつてここは句とすべきであると考えられるのである。次にその詞を引いてみよう。

臘残春未，正候館梅開，牆陰雪裏。冷艷凝寒，孤根回暖，昨夜一枝春至。
素苞暗香浮動，別有風流標致。謝池月，最相宜，疏影横斜臨水。
誰為伝駅騎隴上，故人不見今千里。寄与東君，徒教知人，別後歲寒清意。
乱山万疊何在，但有飛雲天際。故園好，早帰来，休恋繁桃穠李。

（無名氏，『梅苑』卷三）

句式に多少の違いはあるが，両詞の韻字はほぼ一致しており，両詞は次韻の作と考えてよいであろう。後者の前関第一句「臘残春未」の「未」字も，趙温之詞の「体」字と同様仄韻字と見ることがもできるが，両詞が次韻詞である以上，ここは句とみなすのが最も妥当と思われる。

竹磔は最後に，「如後唐莊宗歌頭一調，句豆不明，而確然分句，寧得不敬服」と記している。後唐莊宗の「歌頭」詞一百三十六字体は，万樹が「後半叶韻甚少，必有訛処，不敢擅注句豆，即前半亦未必確然，原注大石調，姑存其体，為餽羊而已」（『詞律』卷二十）と述べる如く，非常に句読のむずかしい詞牌

である。それを、句読の誤りの多い『欽定詞譜』(卷三十七)が、何の議論も展開することなくただ「此詞無別首可校」と註するのみで、「而確然分句」していることに、竹溪は皮肉をこめて「寧得不敬服」と言うのである。

『欽定詞譜』の分句分韻について、今後我々は一つ一つ詳細に検討し、その誤りを正していかなければならないであろう。

十

第十の批判は、『欽定詞譜』所載詞の各文字に付されている、平仄の圈点に対する批判である。

其十、字之平仄、則於字旁、施白圈与黒圈、其可平可仄者、施半白半黒圈、恰襲旧譜之例、於其所謂正体或創始之詞、註可平可仄、所参照句、皆一一註明之、或謂參所録諸詞、遇其不同者、則皆註可平可仄、遂至有全句施半白半黒圈者、見者尤易迷惑、又有以句法相異者对照、殆不可拋、
『欽定詞譜』では、平仄を示す白圈、黒圈^⑨とともに、平にして仄も可のもの、仄にして平も可のもの、とに半白半黒の圈点が付されている。これらは、『欽定詞譜』が参照した詞体に基づいて付されるのであるが、一字でも異なればすべて半白半黒の圈点が付されるため、ひどい時には全句に半白半黒圈が付けられている場合もあり、これを竹溪は「見者尤易迷惑」として批判する。また、多くの詞体が参照されるのはよいが、句法の異なるもので对照が行なわれた例があり、「殆不可拋」と言うのである。

平仄を示す圈点は、便利なようではあるが、あまりにも半白半黒圈が多いとその詞体の実体を見失うことにもなりかねない、「詞譜」にとって必要ではあるが、扱いは注意を要するものであろう。

竹溪は、以下に二調の具体例を挙げて、『欽定詞譜』の平仄校定の杜撰さを指摘している。

(1) 河瀆神

まず竹溪は、「河瀆神」について次のように述べる。

如河瀆神，温庭筠詞，後起，何処杜鵑啼不歇，照孫光憲詞，四壁陰森排古画，則何字可仄，杜字可平，温別一首，暮天愁聽思婦樂，則全相反，詞譜註引暮天句，於何処杜鵑不五字，施半白半黒圈，他措而不記，蓋何字杜字已註之，故有孫詞亦不顧也，扱此則此句可知別有平仄相反者，而不能知何杜二字可仄可平，

『欽定詞譜』（卷七）は、「河瀆神」の作例として温庭筠詞（首句「河上望叢祠」）四十九字体を掲げ、その後関第一句に下のような圈点を付している。

何処杜鵑啼不歇。



竹溪が言うように、「何」「処」「杜」「鵑」「不」の五字に半白半黒圈が施されており、これでは「平仄仄平平仄仄」か「仄平平仄平平仄」かいずれかの句式でないといけないかのような印象を与えてしまう。これらの半白半黒圈は、『欽定詞譜』が註に「後段換頭句，暮天愁聽思婦樂，暮字仄声，天字愁字俱平声，聽字仄声，婦字平声」と述べているように，温庭筠の別の一首（首句「孤廟对寒潮」）の後関第一句「暮天愁聽思婦樂」と校定を行なったために付されたものである。

「暮天愁聽思婦樂」は「仄平平仄平平仄」であり、「何処杜鵑啼不歇」の「平仄仄平平仄仄」とは対照的な平仄式である。この全く相反する両者で校定したために、『欽定詞譜』は「河瀆神」の句式を誤って伝える結果となってしまった。

竹溪は「何処杜鵑啼不歇」を，第二字と第四字の平仄が等しい孫光憲詞（首句「汾水碧依依」）の「四壁陰森排古画」と校定すべきとする。「何処杜鵑啼不歇」は，「四壁陰森排古画」の「仄仄平平平仄仄」と対校すると，

何処杜鵑啼不歇。



となり，これによつてはじめて，第一字と第三字がそれぞれ平にして仄も可，仄にして平も可という，「河瀆神」四十九字体の程式の一つが明らかにされるのである。

『詞律辭典』（「河瀆神」・375頁）は、『欽定詞譜』が示している平仄をそのまま襲っているが、改める必要があるだろう。

(2) 夜遊宮

又夜遊宮毛滂詞，前第三句，花外溪城望不見，不字宜作平声讀，詞譜引秦觀巧燕呢喃向人語句，於花字不字，施半白半黒圈，

毛滂「夜遊宮」詞五十七字体の前関第三句「花外溪城望不見」は、『欽定詞譜』（卷十二）では次のように圈点を付されている。

花外溪城望不見。

●●○○●●●●

『欽定詞譜』が「不」字を●とするのは、「不」字を仄声とした上で、註に「第三句，秦觀詞，巧燕呢喃向人語，巧字仄声，人字平声」と述べる如く，秦觀の「夜遊宮」詞（首句「何事東君又去」，『全宋詞』第1冊，470頁）と対校した結果であった。これに対して竹篔は、「不」字を平声で読み，●を○に改めるべきだと言うのである。

「夜遊宮」の詞体は，ほとんどの作例において，前関後関第三句の末三字の平仄が等しいという特徴を持っている。たとえば，『欽定詞譜』が又体に挙げる賀鑄詞五十七字体では，「想見瓊花開似雪」（前関第三句）「江北江南新念別」（後関第三句）であり，いずれも「平仄仄」となっている。また，秦觀詞では「巧燕呢喃向人語」（前関第三句）「一覺相思夢回処」（後関第三句）であり，「仄平仄」となっているのである。

これを演繹すれば，毛滂詞後関第三句「何不随君弄清淺」の末三字は「仄平仄」であるから，前関第三句の末三字「望不見」も「仄平仄」と考えることができる。竹篔の，「不」字を平声で読むという説は，非常に妥当な説と言えるのである。

『欽定詞譜』は，毛滂詞後関第三句を張孝祥「夜遊宮」詞（首句「聽話危亭句景」，『全宋詞』第3冊，1717頁）の「好是炎天烟雨醒」と比較して，

何不随君弄清淺。



と記している。張孝祥詞前闕第三句「不待崇岡与峻嶺」の末三字も、「烟雨醒」と等しい「平仄仄」であり、『欽定詞譜』はこのような前後関係を全く理解しないまま、校定を行なっているのである。

なお、現在の『詞律辞典』（「夜遊宮」・1363頁）も、「夜遊宮」の詞体を理解せず、『欽定詞譜』の説をそのまま引いている。

以上十項目の批判を述べて、最後に森川竹篔は次の如く結んでいる。

校勘註明之疏，大抵如此，總之，本譜亦竟不免為不具読詞一隻眼人之著也，

これまで見てきたように、森川竹篔の『欽定詞譜』批判は、一部の不明な点を除けば、すべて当を得た極めてすぐれた批判と言えるだろう。このようなすぐれた批判を展開した森川竹篔にとって、『欽定詞譜』が「竟不免為不具読詞一隻眼人之著也」というのは、決して誇張の言ではないのである。

今からおよそ八十年前の一日本人が、このように価値の高い『欽定詞譜』批判を著し、さらにその批判に基づいて『詞律大成』という「詞譜」を編纂したことは、当時の日本における詞学の水準の高さを如実に示すものであろう。従来、この分野では、故神田喜一郎博士や水原渭江氏に研究があるが、なお明らかにすべき問題も多く残されていると思われる。明治大正期の詞学について、現在ではほとんど取り上げられることがないが、中国の詞学との関連や日本文化の中での位置付けなど、今後詳細に究明されなければならないであろう。

また、森川竹篔の『欽定詞譜』批判は、同時に、『欽定詞譜』を越えられない現代の詞学に対する批判でもある。現在最大最高の「詞譜」である『詞律辞典』に、なお『欽定詞譜』の誤りを踏襲している部分があることは、しばしば触れてきた通りである。『欽定詞譜』の説を無批判に盲信して研究に利用することは、我々がよく行なっているところであろう。森川竹篔は、現代のこのような状況をも厳しく批判しているように思える。

今後我々は、『欽定詞譜』の所説を綿密に再検討し、その誤りを正していかなければならない。森川竹磎の十項目に及ぶ『欽定詞譜』批判は、そのための重要な示唆を我々に与えてくれるのである。

註

- ① 「後詰」は、「後結」の誤りであろう。
- ② 拙稿「柳永と太晟府」（『學林』第七号所収，1986）参照。
- ③ 以下、『詞律大成』引用文中における括弧書きは、原註を示す。
- ④ この「趙彦端七十三字詞」というのは、以下に「而七十二字者不得為正体之理」と記していることからみて、誤植であろう。
- ⑤ 『欽定詞譜』は、楊无咎詞の後に「此詞前後段第三句，俱八字，較黃詞減一字，句讀似更整齊，但宋人無填此者」と註している。
- ⑥ 実際は、歐陽修の「看花回」詞（『全宋詞』第1冊，149頁）が、最も早い作例である。ただ、李栖氏『歐陽修詞研究及其校注』（文史哲出版社，1982）は、この詞を偽作であると論じている。
- ⑦ 「鼓笛令」には、他に朱敦儒の作例（『全宋詞』第2冊，866頁）も存在する。拙稿「『欽定詞譜』訂誤」（『學林』第十八号所収，1992）参照。
- ⑧ 『全宋詞』の文字に従う。『詞律』は「就中」を「袖中」に作る。
- ⑨ 竹磎は、白圈、黒圈と言っているが、『欽定詞譜』内府刻本は朱墨套印本であり、実際は白圈と朱圈である。この圈点について、『欽定詞譜』（「凡例」）は「每調一詞，旁列一凶，以虛実朱圈，分別平仄，平用虚圈，仄用実圈，字本平而可仄者，上虚下実，字本仄而可平者，上実下虚」と説明している。